

複数人病室に入院している患者の同室者への気遣いの特徴

藤本ひとみ¹⁾ 高間 静子¹⁾

要 旨：本研究は、複数人部屋に入院している患者の他者への気遣いの質について調べた。文献検討の結果、入院患者の他者への「気遣い」を、「自分の言動・習慣等が他者への迷惑・安寧の阻害・人権の侵害につながらないようにするための繊細な配慮である」と定義した。その結果、気遣いの質をみると「動作の自粛」、「睡眠妨害への配慮」、「共有の場での他者無視・回避」、「他者の意向確認」、「騒音生起防止への配慮」、「規則の尊重」、「無礼の回避」で成り立っていた。

【Key words】 複数人部屋、入院患者、気遣い

緒 言

複数人部屋での療養生活している場合には、相互に同室他者への迷惑、権利侵害がないか、安寧の妨害等について看護的に管理する必要がある。倉重¹⁾らは「患者にとって大部屋での生活は、入院、治療に伴う不安もさることながら、他人との生活を余儀なくされることで、様々な制約と我慢が強いられる」と報告している。しかし、看護管理上、複数人の病室での患者の集団生活で構成員各々が相互に気遣い配慮ができていないかを常に観察できているとはいえない。気遣いとは「思い遣り」であり、具体的には自分の言動・習慣等が他者への迷惑につながったり、安寧な療養生活が妨げられたり、人権の侵害につながらないように日常生活の中で言動を慎むことである。日本人は家庭・社会生活を通じ「他者を気遣う」という態度は学ばれてきているが、近年文化の多様化により考え方の繊細さが希薄となり、自己よがりの言動が目につく、痛みを分かち合う、我慢する、恥じを恐れたり、弱さに対する優しさ等の価値観が薄れ、他者の痛みに傍観的態度をとったり、恥意識が薄れ傍若無人の態度がみられる。このような態度は病室環境のみならず、他の集団環境の中でもしばしばみられる。本研究では、複数人病室内での同居患者個々の同室の他患者に対して、どのような質の気遣いができているかについて調べた。

目 的

複数人病室で入院生活する患者の同室者への気遣いの質を明らかにした。

方 法

1. 研究デザイン：質的記述的研究
2. 研究対象：病床数 400 床の病院の複数人部屋に入院している成人患者 50 名。対象の特徴は成人内科病棟に入院して歩行可能な患者で、循環器・消化器・呼吸器疾患のいずれかの疾病を罹り、面接に応答できる男女とした。対象の背景は年齢、性別、疾患分類、居室の患者数の 4 つに分類した（表 1）。
3. データの収集：面接内容は、患者が病室にいる時、面会、食事時間、病室への出入、回診・治療時、病室の窓の開閉、ベッド周囲のカーテンの開閉、起床時、消灯後、室内排泄時、会話時、テレビをつける等の機会、どのような気遣いを同室者に対して行っているかを質問した。質問は半構成的質問を作成し、面接調査を行った。
4. データの処理：面接で得られた情報のうち、気遣いと判断できる情報を箇条書きにしてコード化し、次にコード化した内容のうち同質と判断できるものを

¹⁾ 福井医療短期大学 看護学科
(受付日 2010 年 3 月)

グループ化し、グループ化した情報の質を最も表現している名前を与えた。

5. 研究における倫理的配慮：面接調査を行うにあたり、研究の主旨を説明し情報提供することに同意した患者の承諾書を得ると同時に、面接で得られた情報は他者に漏らさず秘密とし、情報提供者の名前を特定できないように記号化する、情報内容は情報提供者を特定できないようにしていること、情報は本研究以外に使用しないこと、面接途中で情報提供を断りたい時はいつでも中止できること、情報提供を断っても治療・看護をうけることにおいて不利益をこうむらないことを説明し情報提供の承諾を得た。
6. 調査期間：2006年5月1日から6月2日

表1：調査対象者の背景 n=50

事 項	分 類	数 (%)
年 齢	40～49	24(48.0)
	50～59	6(12.0)
	60～69	8(16.0)
	70 以上	35(70.0)
性	男 性	23(46.0)
	女 性	27(54.0)
疾 患	循環器系	2(4.0)
	消化器系	5(10.0)
	呼吸器系	5(10.0)
	脳神経整形系	30(60.0)
	そ の 他	8(16.4)
居 室	3 名 居室	8(16.0)
	4 名 居室	42(84.0)

結 果

複数人部屋における患者の気遣いとその特徴面接の結果、患者が行っている気遣いと判断できる部分をコード化すると、162件の気遣いが確認できた。次にこれらのコード化した内容の意味が同質と判断できるものをグループ化すると、28の特徴的な気遣いが明らかになった。この28の気遣いのそれぞれの性質を最も表現している名前をつけて気遣いの概念とした(表2)。

気遣いの性質

グルーピングした具体的な気遣いの特徴から①動作の自粛、②睡眠妨害への配慮、③共有の場での他者無視回避、④他者の意向確認、⑤騒音生起防止への配慮、⑥規則の遵守、⑦無礼へ回避と命名した。

1) 動作の自粛

この気遣いは、病室の同室者に対しての気遣いである。自粛とは、自分で自分の行いを慎むことである。具体的な気遣いには「箸で人や物を指さない」、「食器の音を立てない」等であった。したがって、これらを「動作の自粛」とした。

2) 睡眠妨害への配慮

この気遣いは、睡眠が生理的機能の維持に必要であり、活動の休止を望んでいる他者の欲求を妨げないように心を配ることである。具体的な気遣いには「消灯後はテレビをつけない」、「夜間のドアの開閉時に音を立てない」、「夜、光が眩しい時カーテンを閉める」、「早朝覚醒しても音を立てない」、「睡眠している人がいれば静かにする」、「起床時間まで静かにする」、「寝返り時に音を立てない」等がみられ、これらを「睡眠妨害への配慮」とした。

3) 共有の場での他者無視回避

複数人部屋の病室は生活の共有の場である。共有はある物の所有権が各自の持分として複数人に帰属する状態であることを考えると、所有権を持つ同室者を無視するということは権利を無視することになる。つまり、他者無視を回避する気遣いということから、「共有の場での他者無視回避」と命名した。具体的な気遣いには「面会時、盛り上がらないようにする」、「挨拶をする」、「院外の食物を気付かれないように食べる」等があった。

4) 他者の意向確認

この気遣いは、病室内の共有物であるカーテンや窓等の開閉時に、自分勝手には出来ないという他者への配慮の気遣いである。複数人部屋の場合には、部屋は共有物であり、共有物に対して、それをどう使用するか、どう扱うかという時には、共有者の意向を汲む必要がある。意向を聞くことによって相手の所有権を尊重することになる。プライバシーの侵害を防ぐということでのベッド間の間仕切として役割を持つカーテンの開閉、空気や室温調節に不可欠な部屋の窓の開閉の場合でも、共有者個々のニードは異なる。したがって、

複数人部屋が同室者の共有物である限りは、同室他者の意向を汲むことで、共同生活に和をもたらすことができる。したがって、カーテンの開閉、窓の開閉等のこの種の気遣いは、「他者の意向確認」と命名した。

5) 騒音生起防止への配慮

騒音は、人の或る目的がある時に不必要な音で、障害になる音である。自分が起こす騒音に気配りができない場合は、他者の目的遂行の障害となり人間らしい生存を全うする生存権をおびやかすことになり、複数人部屋で共存する資格がない。他者の人間らしい生存を脅かす音を生じないようにする気遣いということで、「騒音生起防止への配慮」と命名した。具体的な気遣

いには「在室中は音を立てない」、「テレビの音を小さくする」、「テレビを21時以降はつけない」、「テレビ鑑賞時イヤホンをつける」、「大声で話さない」、「うるさくしない」、「面会時、小声で話す」、「病室の出入り時音を立てない」等があった。

6) 規則の遵守

この気遣いは、入院患者一人一人が病院内の規則に沿った生活を強いられている現状から生じている反応である。規則とは、おきて、きまりである。遵守とは、法律や規則を従い守ることである。具体的な気遣いには、「早朝覚醒しても起床時間まで我慢する」、「消灯時間に寝る」、「窓は起床時間後なら静かに開ける」、「起

表2：複数人部屋に入院している患者の他者への気遣い

気遣いの性質	具体的な気遣い
動作の自粛	箸で人や物を指さない 食器の音を立てない
睡眠妨害への配慮	消灯後はテレビをつけない 夜間のドアの開閉時に音を立てない 夜、光が眩しい時カーテンを閉める 早朝覚醒しても音を立てない 睡眠している人がいれば静かにする 起床時間まで静かにする 寝返り時に音を立てない
共有の場での他者無視回避	面会時、盛り上がらないようにする 挨拶をする 院外の持込の食物は気付かれないように食べる
他者の意向確認	カーテンは了解をとってから閉める 窓を開閉してよいか確認する
騒音生起防止への配慮	在室中は音を立てない テレビの音を小さくする テレビを21時以降はつけない テレビ鑑賞時イヤホンをつける 大声で話さない うるさくしない 面会時、小声で話す 病室の出入り時音を立てない
規則の遵守	早朝覚醒しても起床時間まで我慢する 消灯時間に寝る 窓は起床時間後なら静かに開ける 起床時間後に静かに動く
無礼の回避	他者の回診を受けている他者を見ないようにカーテンをする 処置時にカーテンを閉める

床時間後に静かに動く」等があった。したがって、これらを「規則の遵守」とした。

7) 無礼の回避

この気遣いは、回診や処置時に他者に対する配慮から生ずるものである。無礼とは、他人に接する際の心得をわきまえていないこと、礼儀に欠けることである。具体的な気遣いには、「他者の回診を受けている他者を見ないようにカーテンをする」、「処置時にカーテンを閉める」等があった。したがって、これらを「無礼の回避」とした。

考 察

複数人病室の同室者への気遣いを調べた結果、「動作の自粛」「睡眠妨害への配慮」「共有の場での他者無視回避」「他者の意向確認」「騒音生起防止への配慮」「規則の遵守」「無礼の回避」の7項目の同室者への気遣いが明らかになった。人間は自分が発する音は騒音とは感じないが、他者が発する音は不愉快な音として感じるが多い。中神ら²⁾も「病室に人の出入りが多い」「まわりの音が気になる」等の療養生活から起こってくるストレスを報告している。したがって、各自が不用意な動作を自粛することで他者にとっての騒音とならない配慮が「動作の自粛」という気遣いとして出てきているものと考ええる。また、「睡眠妨害への配慮」という気遣いは、床上生活時間の長い患者は目を閉じて安静をとっていることから、常にこの種の配慮が取られているものと考ええる。関矢ら³⁾の、患者の眠りを妨げる音についての調査では、「話し声」があることを報告していた。つまり、入院患者は話し声等、夜間に音を立てることは眠りを妨げる因子となることを知っているために、睡眠の妨害にならないような気遣いをしているものと考ええる。「共有の場での他者無視回避」の気遣いは、複数人病室は同室者の共有の場であることを認識できおり、同室者である他者の意向を無視しては相手を不愉快にさせ、ストレスを与えることになり、さらに、相手の存在の無視は、人間誰もがもつ人間関係の悪化に繋がることを避けたい意識がこの種の気遣いとして出ているものと考ええる。倉重ら¹⁾も、「患者はお互いに協力し、時に妥協すること」を心得ながら、生活をする場所として病室を受け止めている」と報告している。「規則の遵守」は集団生活の最も基本的なことで、この規則を破る態度は社会生活上の

恥じにつながるという意識からきているものと判断する。「無礼の回避」の気遣いは、無礼は他者を人間として尊重できない態度で、人間関係の破綻につながり、同室内での人間関係がもたらすストレスを回避したいというニーズからでてきたものと考ええる。

以上のことから、複数人病室での患者のこれらの気遣いは、成人した人間の他者への配慮として欠くことのできないものである。本報の結果から複数人部屋で生活する患者は、これらの気遣いを他者への配慮として成人するまでに習得できていることがわかる。したがって、これらの特徴的な気遣いをどれだけできているかを評価する場合、複数人病室の療養環境が望ましい状態にあるかを判定する視点として活用できるものと考ええる。

結 論

複数人病室で入院生活する患者の同室者への気遣いの質について、「動作の自粛」「睡眠妨害への配慮」「共有の場での他者無視回避」「他者の意向確認」「騒音生起防止への配慮」「規則の遵守」「無礼の回避」の7項目が明らかになった。これらの気遣いの特徴をみると、「動作の自粛」「睡眠妨害への配慮」「騒音生起防止への配慮」「規則の遵守」などに対する気遣いは、集団生活において要求される基本的な事項で、病床環境の保全への気遣いと判断する。一方、「共有の場での他者無視回避」「他者の意向確認」「無礼の回避」等の性質の気遣いは、他者尊重を配慮した気遣いであり、他者との協調・共有等が来てこそ共同生活の円滑が望まれることを考えると、本研究における対象である患者は、社会人として共同生活の中での健全な気遣いができていることが推察できる。

文 献

- 1) 倉重鏡子他：大部屋での患者同士の人間関係におけるストレスを知る—アンケート調査より—、院内看護研究発表会収録（山口大学医学部附属病院）、p76—81、1999。
- 2) 中神さゆり他：個人入室患者のストレス要因—実態調査を実施して—、名古屋市立大学病院看護研究収録集2000号、p116—121、2001。
- 3) 関矢美幸他：眠りを妨げる音についての調査、仙台赤十字病院医学雑誌、12巻1号、p83—87、2003。